昭和31年2月20日第三種郵便物認可　平成26年6月26日発行(木曜日発行)(6月19日発売)第59巻第24号

週刊新潮

6月26日風待月増大号

特別定価420円

ワイド特集

土砂降りを突っ走れ！

24

「近藤誠」流なら今頃は墓の中!?

6度の摘出手術を経験した「黒沢年雄」のがん対処

特別読物

近藤医師の主張とは正反対

闘い続ける名優

僕の〝がん〟との向き合い方は〝定期検査〟と〝早期発見〟、そして〝早期治療〟の3点に尽きます。

それだけに、このところ話題になっている近藤誠先生の主張には違和感を覚えてきました。実際に患者としてがんと対峙してきた僕からすると、「がんは切らずに治る」「検診は百害あって一利なし」といった意見にはどうしても同意できない。

確かに、昨年ミリオンセラーになった『医者に殺されない47の心得』に目を通すと、〝なるほど〟と思わせる記述も少なくありません。ただ、説得力があるだけに「もし近藤先生に相談していたら、今頃は墓の中にいただろうな……」と思ってしまうのも事実です。

僕は古希を迎えた今年までに計6回のがん手術を経験しました。まぁ、言うなれば〝がんのベテラン〟ですね。しかも、昨年は当たり年だったのか、4度の手術に臨んでいます。

2月に内視鏡手術で食道がんを切除したものの、半年後に胃カメラを飲んだら再発が確認されてしまった。しかも、同時に初期の胃がんまで見つかったんですね。10月になって、その2カ所を改めて手術で取りましたが、今度は悪性ポリープが胃の粘膜まで達している危険性があると分かった。そのため、年末に腹腔鏡手術で胃の3分の1を切り取りました。

それだけ聞くと、壮絶な闘病生活を思い浮かべるかもしれませんが、全然そんなことはなくてね。僕の場合、早ければ手術から3、4日で退院して、1週間後にはスポーツジムにも復帰しています。

そのせいか、顔見知りのジムのトレーナーに「いやぁ、こないだ手術してさ」と話しても、キョトンとした表情で「黒沢さん、どこか悪いんですか?」だって。そりゃ、前の週もジムに顔を出しているんだから無理もない。いちいち「実はがんなんだよ」と説明して心配されるのも面倒でしょう。だから、周囲にもがん闘病は隠してきたんです。

一方で、がんを公にしなかったのにはもっと深刻な理由もあります。

僕が初めてがんの告知を受けたのは1992年。大腸がんでしたが、この時に僕は敢えて記者会見を開きました。下手に隠して憶測を呼ぶよりも、潔く発表しようと思ったからです。しかし、結果的にこの会見が裏目に出まして……。

手術を前に、薄くなり始めた頭を丸めたんですが、「黒沢は抗がん剤の副作用で髪も抜け落ちてしまった。役者としての再起は無理だろう」というイメージだけが独り歩きしてしまった。

退院後に仕事がガクンと減ったことは、闘病と同じくらいに大ダメージでした。

がんが恐ろしいのは、患者の身体だけでなく、仕事や生活にも影響を及ぼすことです。手術が成功して仕事に復帰しようにも、テレビや映画のスタッフからは「撮影現場で倒れられたら大変だ」とか「ワイルドな役柄は別の俳優に頼もう」と思われてしまう。一般企業に勤めている方にも、多かれ少なかれ、そうした問題は起こり得ると思います。特に、僕は人気商売の芸能界で生きていますから〝がん〟のイメージは避けたい。それ以降、なるべく病気の話は控えてきました。

とはいえ、昨年の胃がん

突然の「告知」に号泣した夜、そして、役者生命を懸けて臨んだ開腹手術。6度ものがん闘病から生還した俳優・黒沢年雄(70)が、自らの経験から『患者よ、がんと闘うな』の近藤誠医師に物申す。病魔に打ち克ったアクションスター流のがん対処法とは――。

の手術は退院まで1カ月近く掛かったので、どうしても怪しまれます。そこで周囲には、〝テニスをしていたらベンチに激突して肋骨と右手の小指を骨折した〟ことに。この話、未だに信じている友人が多いんです。

まぁ、こんな笑い話ができるのも、がんとの付き合いが長くなったから。僕だって最初のがんの時は、奈落の底に突き落とされたような絶望を味わいました。

痔だと信じて〝座薬〟

大腸がんが発覚した92年当時、僕は48歳の働き盛りでした。実は、その3年ほど前から血便が出るようになって、掛かりつけの内科医にも相談していました。ただ、その医者の診断は一貫して〝痔〟だった。僕もまさかがんとは思いませんから、痔だと信じて3年間ずっと座薬を入れていました。ところが、家族とハワイ旅行をしている時にホテルで大量の下血があって、さすがに只事じゃないと慌てたんです。

たまたまテニス仲間に病院長がいたので、内視鏡科の先生を紹介してもらい検査を受けました。すると、先端が真っ黒になったポリープが大腸に見つかった。病理検査の結果、1週間後に大腸がんと判明しました。

告知には女房と、まだ小さかった娘も同席していました。検査した先生は、「ポリープの上層部が〝がん化〟していますが、早期に発見できたので切除すれば転移の心配はほとんどありません」

と親切に説明してくれました。女房も娘も冷静に先生の話を聞いていた。

ただ、僕だけはね……。妻子の前では平静を装っていたけど、もの凄いショックでしたよ。がんと聞いて、真っ先に頭を過ったのは〝死〟の一文字。自宅に戻ると、自分の部屋に閉じこもってワンワンと声を上げて泣きましたね。

そもそも、僕はがんに対してひと一倍、強い恐怖心を抱いていました。というのも、16歳の時におふくろを咽頭がんで亡くしているからです。4人兄弟の長男だった僕は、亡くなる前日に病室に呼ばれ、闘病で痩せ細ったおふくろから〝年男(本名)、後は頼むよ〟と言われた。これがトラウマになっていたんです。

がんと宣告されて、おふくろの気持ちがよく分かりましたよ。死ぬこと自体が怖いというよりも、女房と娘に何もしてやれなくなることが悔しかった。家を建てたばかりでローンも残っている。少なくとも娘が成人するまでは一緒にいてやりたい。なのに、このままでは男としての責任を果たせないんじゃないか。そんな悔しさだけでした。

でも、散々悩み抜いて、

涙も枯れ果てた頃にハタと気付いたんです。

おい、ちょっと待てよ。俺の取り得は運の良さじゃないか。何万人の中から東宝のニューフェイスに合格したし、『時には娼婦のように』というヒットにだって恵まれた。今回のがんも早期発見できてラッキーだったのかもしれない。

だから、僕は神様に約束したんです。「どうか助けて下さい。その代わり、どんなにつらいリハビリでも一生懸命、努力します」って。

その結果、内視鏡手術は予想以上に短時間で終わりました。しかし、切除したポリープは〝2・3㌢×1・8㌢〟と想定より大きかった。手術後に先生からはこう言われました。

「このサイズだと、発見があと半年遅れていたら間違いなく命に関わったでしょう。手術は成功ですが、ここまで大きいとリンパ節に転移している可能性が5%ほど残る。私の身内だったら絶対に開腹手術をさせます。黒沢さん、私に任せてもらえませんか」

これには頭を抱えました。役者という仕事柄、ベッドシーンの撮影もあるので傷跡が残っては困ります。ただ、先生はなるべく傷跡が目立たない手術法を親身に説明してくれた。それに当時は僕もまだ40代。それから先の人生をがんの転移に脅えて過ごすより、思い切って開腹手術をしようと決断しました。

〝イボ〟でも取る感覚

手術前の悩みに比べれば、リハビリなんて屁でもないですよ。自慢じゃないですが、集中治療室で麻酔から目覚めた直後に歩いて病室まで戻りましたからね。そりゃ、痛いのなんの。包帯が巻かれたお腹に手を押し当てて、涙をポロポロ流しながら歩いた。すると、看護婦さんや入院患者さんの「さすが黒沢さん、やっぱりアクションスターは違うね」って声が耳に入ってきました。根がお調子者ということもあるけど、そんな声援にも勇気をもらったんです。

2008年には膀胱がんを患ったし、昨年は4度の手術でしょう。でも、最初の大腸がんと比べると、心境としては〝イボ〟でも取るような感覚なんです。

そんな僕が常に心掛けているのは、やっぱり〝早期発見〟ですね。いまはCTスキャンと胃カメラの検査を年1回、受けています。胃カメラも咽頭から食道、そして胃まで入念にチェックしてもらっている。昨年の食道がんもこの検査で発覚しました。食道は襞で覆われているので、そこから小さなポリープを見つけるには相当な技術がいる。信頼の置ける、優秀な医者との付き合いは大事です。それ以外にも、大腸は4年に1回、膀胱は2年に1回の内視鏡検査があります。膀胱がんの再発に備えての検査だけど、鉛筆ほどの内視鏡をセガレの先から入れるので痛いんですよ。

でも、定期検査のお陰で僕の命は助かりました。もっと早く近藤先生の本に感化されて、「検診は百害あって一利なし」と考えていたら、もうこの世にいなかったと思います。

他に気を遣っているのは健康管理。酒とタバコはやめてから随分経ちますし、日々のスポーツは欠かしません。がんの影響で体力が落ちたとも思わない。週に2、3回通っているスポーツジムでは、筋力トレーニングとウォーキング、それに水泳を全部で2時間半ほど。趣味のテニスとゴルフも続けていますね。こないだゴルフをした時、「今日は天気が良いからワンハンやろうよ」って誘ったんだけど、一緒にコースを回っていた仲間から「クロさん、こっちがバテちゃうよ」と苦笑いされました。

僕の場合、いつ7度目の告知があるか分かりません。それはやっぱり怖いですよ。宣告されると、どうしてもがんの恐怖が頭から離れなくなります。でも、僕は定期検査や早期治療で〝やるべきことはやっているじゃないか〟と考えている。だからこそ、普段の生活を充実させることができるし、病気を忘れて笑顔で生きていられるんです。

その手術については、近藤先生の仰るように「切らずに治る」可能性のほうが高かったかもしれません。それでも患者は、少しでもがんの恐怖から自由になりたい。その一心なんですね。だからこそ、リスクにも言及して、開腹手術を勧めてくれた当時の先生には心から感謝しています。そして、先生を信じて手術を受け、〝転移なし〟という結論を得られたことが何よりも嬉しかった。

連載第21回

逆張りの思考

HONZ代表
（元日本マイクロソフト社長）
成毛 眞

老後のための友人作り

年を取ると友人は減っていく。先立たれてしまうこともあれば、仕事の切れ目が縁の切れ目となって連絡が途絶えることもある。それが老後だとするならば、あまりにも寂しい。そこで私は旧交を温めるのにも新しく友人を作るのにも、ゴルフを活用している。2つのゴルフ会を設立し、年に3、4回、集まってゴルフをしているのだ。

最も長く続いているのは、国際孔球会だ。孔球とはゴルフを意味する。いかにも中国人富豪とのゴルフ会のような名称だが、メンバーは全員が日本人で、政治やマスコミの関係者がほとんど。この会は元三重県知事の北川正恭さんと共催している。彼が政治の世界から足を洗った2003年に発足し、この4月でラウンドは54回目を迎えた。

もうひとつはレジェンド会だ。何のレジェンドが集っているかといえば、かつてのパソコン業界のレジェンド。大手メーカーの元幹部が名を連ねている。この会は私がマイクロソフトの社長だった当時、インテルの社長を務めていた傳田信行さんとの共催である。すでに多くのメンバーが第一線を退いているため、平日にラウンドできるというメリットがある。メンバーには一斉にメールで声をかけ、都合のつく人だけが参加する。たいてい3組12名ほどが集まり、ラウンド後、簡単に近況報告をして解散する。

どちらもあくまでゴルフ会でありコンペではない。だから、トロフィーなどは用意せず、表彰もしない。ゴルフ会の目的は競うことではなく、だらだらと長く回を重ねることなので、その障害となる面倒なものは徹底的に排除している。2つのゴルフ会は、共同開催者のどちらかが死ぬまで続けることになっている。

面倒を排除してはいるものの、イベントの企画はなかなか骨の折れる作業であり、ゴルフ会の主催も例外ではない。回を重ねるごとにだんだんと億劫になって、日程を決めるのも連絡をするのも滞り、挙げ句、フェイドアウトするのは目に見えている。

そこで、放り出さずに続けられるように共催というかたちをとっている。こうしておくと互いに「次はどうする？」と牽制しながら相談をすることになり、立ち消えにならずに済む。

この運営方法のヒントは、日本最大級の異業種交流会THE CLUBから得た。この会の幹事は渡辺幸裕さんと中島敏一さんの2人だ。余談だが、渡辺さんはかつてサントリー宣伝部に勤務し、開高健の小説やエッセイにデュークとして登場する人物である。THE CLUBは、非営利で、2人が共催し、紹介制の完全会員制。その都度参加できる人が参加するという無理のないスタイルで、20年近く続いている。

そのTHE CLUBにあやかって長寿たらんとする2つの我がゴルフ会に今年、新たにマイクロソフトOBによる会が追加された。メンバーは主に、私も長く所属した営業部門とマーケティング部門の連中だ。厳密に言うと私は主催者ではなく、当時の部下が「成毛さんも来るから」という誘い文句を使えるように名義貸しをしているだけだが、これもまた、貸している方も借りている方も勝手には止められない。

私がマイクロソフトを退社し14年が過ぎてこの会ができたのは、当時の部下たちの多くが40代となり、仕事も家庭も落ち着き始めたからだ。まだ忙しいという社員や元社員には、後からゆっくり加わってもらいたいと思っている。

3つのゴルフ会で年に4回ラウンドしたとして、それだけで月に一度はクラブを振ることになる。長くゴルフを続けられる体力づくりの場としても申し分ない。もう少し増やしてもいいくらいだ。

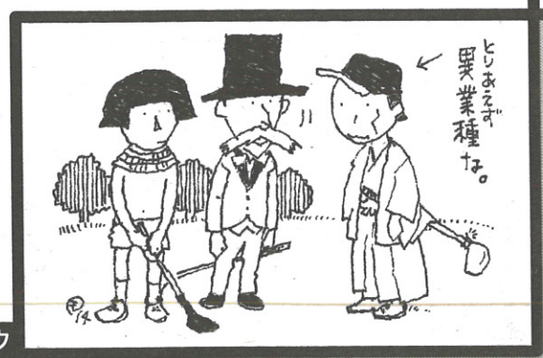

イラスト モリナガ・ヨウ